

「ソドムのための執り成し」(創世記一八章一六〜三三節)

1 神のパートナー

三人の見知らぬ客がアブラハムを訪れる、先週の聖書箇所はこの興味深い情景を物語っていました。

この三人はじつは神の「化身」なのです。その内の一人が主なる神ご自身、二人が御使いです。人間の姿でアブラハムに現れた。はじめアブラハムはそれがだれか分かりませんでした。気づかずに旅人をもてなした。謙遜な態度で、心からもてなしたのです(ヘブライ一三・二)。

しかしそれが神ご自身の一行だということに、アブラハムは、三人の中の一人と話をするうちに気づいたようです(一八・一〇、一三)。

この神、人間の姿をして現れたこの神が、今日の聖書箇所一八章後半でも、一九章でも中心です。今日の一八章後半では、アブラハムとの対話の中で、主なる神の深い御心が明らかになりますし、一九章ではこの神の行為、裁き、ソドムの滅亡が描かれます。

ところで先週私は、アブラハムにとって、主なる神というのは、何か恐ろしい、気をつかわなければならぬ特別の存在というより、むしろ畏敬と共に近い、毎日の生活の中で、いつもそこにいる存在、互いに信頼し合っている存在だというようなことを申しました。

そのことを私が一番感じたのは一七章でした。アブラハムが九九歳のとき、イシュマエルが生まれて一三年後、神が現れます。妻サラに子供が産まれると言われたアブラハムは、ひれ伏しながら、つい笑ってしまう。これはもちろん神を疑っている笑いだと思いますが、しかしそのすぐ後、アブラハムは、言われた通り、割礼を自ら受けると共に、イシュマエルをはじめ家で生まれた男子すべてに割礼を施しています。こういうところでは、神の言葉を、なるほど笑いながらも、すぐに言う通りに割礼を受けるといふようなところ、こういうところに、神への彼の根本的な信頼、従順を私は感じていきます。

しかしこうした主なる神とのアブラハムとの関係は、もちろんアブラハム自身が構築したのではなくて、神がつくってくださったものです。それを示しているのが、今日の箇所のはじめのところにあります。

主は言われた。「わたしが、行おうとしていることを、アブラハムに隠す必要があらうか。アブラハムは大きな強い国民になり、世界のすべての国民は彼によつて祝福に入る。わたしがアブラハムを選んだのは、彼が、息子たちとその子孫に、主の道を守り、主に従って正義を行うよう命じて、主がアブラハムに約束したことを成就するためである」(一七〜一九節)

「わたしがアブラハムを選んだ」という一文があります。主なる神がアブラハムを選んだ。「選び」のことです。この言葉にはまた「知る」とか、「愛する」というような意味も含まれています。選びという言葉で神と人の関係が語られるのは聖書では

ここが最初です。

つまり、アブラハムが神との関係をつけたわけではありません。反対にアブラハムを永遠から選り分ち、知り、愛したもうのは神です。神が、その関係をつくりだしたのです。

何のための選り分けでしょうか。選り分けにおいて、選り分けの目的が問われなければならないのです。それは、彼に始まる神の民イスラエルが主の道を歩み、正義を行うようになるため、世界のすべての人に祝福をもたらすためです。その使命にアブラハムが生きるため、それがアブラハムの選り分けの目的です。

こうしてアブラハムは、主なる神のパートナーとされたのです。神のパートナーとしてのアブラハム。それゆえ彼に、神が「行おうとしていることを」明らかにするのは、理解できることです。具体的には、低地の町ソドムとゴモラを滅ぼそうとしていることです。そのことをなぜ「アブラハムに隠す」必要があるのでしょうか。神のパートナーとしてのアブラハム。神は彼なしにみわざをなそうとしない。そのことは、少し拡大して考えれば、私どもなしに、教会なしにみわざをなそうとなさらないということでもあります。

2 全世界の裁き主

ソドムとゴモラ、ヨルダン低地の五つの都市の中の代表的な町です。かつてアブラハム自身、その五つの都市のため、カナン支配者でもあったメソポタミヤの諸王たちと戦い、勝利したこともありましたが（一四章）。

主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう」（二〇～二二節）。

「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい」とあります。甥のロトが移っていったときでも、すでにその住民は邪悪で、「主に対して多くの罪を犯していた」（一三・一三）のです。

この地にアブラハムの甥ロトが移動したことは、むろん私どもは知っていますが（一三章）、アブラハムの神、主なる神とこの地の関係がどうであったかは、分かりません。しかし事実は、彼ら神の裁きが下される、滅ぼされることとなります。ソドムとゴモラの滅亡、詳しくは一九章で語られます。二つの地名は、これ以後、旧約聖書から、新約聖書にいたるまで、いつまでも神の裁きの実例として、象徴として語られることとなります（マタイ一〇・一五、ローマ九・二九）。ソドムとゴモラはいまは死海の南の湖底に沈んでいます。

神はしかしここで、「訴える叫び」を聞き届け、直ちにソドムに、滅ぼすために赴くというようにはしていません。慎重です（「わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう」）。そのためアブラハムの客人たちの内の二人が、ソドムに向かつて行きます（一九・一）。

二人の御使いがソドムの方に向かうのを見送りながら、神の思いを打ち明けられた

アブラハムは「なお、主の御前にいた」（二二節。「主の前に立っていた」口語訳）と書いてあります。

アブラハムは主の前に立っていた、立ちつづけていたのです。これまで私どもが見てきた、信じ、そして従うアブラハムとはずいぶん違った姿を見せています。彼は主の前に自ら立つのです。

それは自分のためではありません。いま神によって滅ぼされようとしているソドムに甥ロトとその家族がいる、彼らも一緒に滅ぼされてしまうのか、そのことを慮ってのことでも必ずしもありません。それは「ソドムのための」執り成しです。神のパートナーとして、神の御心を知らされて、その神のわざ、その正しさをアブラハムは問うのです。

アブラハムはなお、主の御前にいた。アブラハムは進み出て言った。「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですが、あの町に正しい者が五十人いるとしても、それでも滅ぼし、その五十人の正しい者のために、町をお赦しにはならないのですか。正しい者を悪い者と一緒に殺し、正しい者を悪い者と同じ目に遭わせるようなことを、あなたがなさるはずはございません。まったくありえないことです。全世界を裁くお方は、正義を行われるべきではありませんか」（二二〜二五節）。

アブラハムの神とソドムとゴモラのそもその関係は分からないと、先ほど申し上げましたが、ここでアブラハムは主なる神を「全世界を裁くお方」と呼んでいることに注意したいと思います。アブラハムの信仰の言い表し、告白です。ソドムも、ゴモラも、まさに全世界を統べ治めておられる方の外にあるのではない、その支配の下にあるのです。

このようなお方が公正に裁きを行わなくてよいのでしょうか。正義を行わなくてよいのでしょうか。実際主はすでにアブラハムに、彼の子孫にも「主に従って正義を行うよう」教えよと命じていました。

正しいとは、正しくない者を裁くから、正しいのです。正しい者を滅ぼし、正しくない者を生かすなら、正義でも、公正でもない。たとえ、正しい者がどんなに少数であつても、です。ここでいう五十人が、ソドムの人口のどのくらいを占めていたのか分かりません。いずれにせよ正しい者と正しくない者を無差別に、十把一絡げに滅ぼすことは、正義に反することです。

主はアブラハムの主張を認めます（二六節）。

3 キリストを思い起こす

正しい人が五〇人いても滅ぼすのか、正しい人が五〇人いたら滅ぼさないのか、このアブラハムの問いは、いずれにせよ、世界の裁き主、歴史の支配者としての権能を論難しているというではありません。

そして「五十人いるならば、その者たちのために、町全部を赦そう」という主の答えも明白です。

しかしそこになお曖昧なものがないわけではありません。数字の問題です。五十人以上なら許される、それなら、それ以下の人数ではだめなのか、という問題です。アブラハムは謙遜のかぎりを尽くしながら、自分は「塵あくたにすぎない」、「お怒りにならずに、もう少し言わせてください」と言いながら、問いを重ねます。基本的な論理は、五十人の時と同じです。四五人では、四〇人では、三十人、二十人、そして十人では・・・。

アブラハムは言った。「主よ、どうかお怒りにならずら、もう一度だけ言わせてください。もしかすると、十人しかいないかもしれませんが」。主は言われた。「その十人のためにわたしは滅ぼさない」。主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った(三二〜三三節)。

「主はアブラハムと語り終えると、去って行かれた。アブラハムも自分の住まいに帰った」とあります。

それからソドムに赴いたのは二人の御使いです。しかし主ご自身も、直接ではないとしても、その言葉をもって滅びと救いに関わります。それは、来週、一九章を取り上げるときに、確認することにします。

問題は対話が一〇人で止まったことです。これはどう考えたらいいのでしょうか。十人はいるから、安心してそれ以上問うのを止めたということでしょうか。あるいはそれ以上問うて、神の尊厳を、あるいは神の自由というものを損ねてはいけなさと考えてそれ以上進まなかったのでしょうか。

私はこうでないかと思えます。それは、五〇人からはじめて、四五人、四〇人、三〇人、二〇人、そして一〇人と、すべてについて、全部、わたしは滅ぼさないと主は答え、語っているのです。「神の救いの意志は罰する意志より優越している！」(フオン・ラート)ということです。これが、神のもっとも深い御心、それがアブラハムとの対話の中で引き出され、あらわとなったのです。それがいまアブラハムの確信となったのです。

新約のメッセージを旧約聖書に読み込むことは、慎まなければなりません。旧約が新約を指し示しているときは、そのかぎりではありません。そうです。五〇人から最後は一〇人まで来て、その先に、一人でもいれば滅ぼさないと神の言葉を、アブラハムと共に私どもも想定、確信することが許されます。義人はいない一人もいない(ローマ三・一〇)この世界にあつて、ただひとりイエス・キリストだけが、その地上の生涯を、神の御心にそって生きた。「キリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです」(コリ一・三〇)。このひとりの正しい人によって、人はみな滅びから救われるのです。

このイエス・キリストのことを思い起こすように、今日の箇所、ソドムのための執り成し、神との対話は促しているように思います。裁きではなく、滅びではなく、救いこそが神の変わらぬ根本の思いです。そのことを今日も、感謝と賛美をもっておぼえたいと思えます。